



「感じる、ということ」

高崎健康福祉大学准教授 戸澤 由美恵

「ナイト・オン・ザ・フラネット」

もし目が不自由な人が「映画に行く」と言ったら、あなたは思うでしょうか？

私の好きな映画に「ナイト・オン・ザ・フラネット」という映画があります。日本でとても有名とは言えないかもしれませんが、数々の良質な映画で日本でもファンが多いジム・ジャームッシュ監督の1991年の映画です（原題は「NIGHT ON EARTH」）。この映画は世界の五つの都市で起こる、タクシードライバーと乗客との人間模様を描くオムニバス作品です。何年かに一度、本棚から取り出して、このDVDを観ます。どれも興味深いエピソードですが、そのなかでパリのエピソード、移民のタクシードライバーと目の不自由な若い女性とのやりとりは特におもしろく感じました。

ドライバーは、その女性を乗せると、興味津々で次々と（不躰な）質問を投げつけます。ドライバーの「生まれつきか？」「不自由だろうな。」という同情的な言葉から、やりとりが始まり、そして、こんな会話が出てきます。

「あんたと同じよ、物を食べ、飲み、味わう。音楽を聴き、音楽を感じる。映画だって行くわ。」

「映画へ？見えないのに？」

「映画を感じるのよ。音は聞こえるんだし…。説明してもムダだわ。」

「映画に？」と聞き返すドライバーは「まさか」というようにニヤついてしまいます。私も「えっ？」と思いました。（理由は後で）

「俺の肌の色は（わかるかい）？」

さらに、会話は続きます。彼女が、意外に

（！）、鋭いことに気づいて質問します。

「俺の肌の色は（わかるかい）？」

「そんな事、関心ないわ。」

「肌の色って違うんだぜ。」

「緑でも、ブルーでも、色の違いなんか無意味よ。…私は色を感じる。分からないでしょ。」
ここでも、私は「えっ？」と思いました。それは、私自身の「感じる」にまつわるエピソードを思い出したからです。

色を「感じる」視覚障害者

大学院の先輩で、年配の女性がいました。視覚障害児の支援に関わっていた方で、冬になってマフラーを編もうとしていた時に、子どもが「何色にするの？ねえ、先生、赤がいいよ！赤ってさ、明るくてさ、暖かくってさ…」と。先天性の全盲の子どもがそう言うのだ、と話してくれました。

もう1つ思い出したエピソードがあります。就職した頃のこと、最寄り駅で降りようとしたとき、白杖をついた視覚障害の男性が同じ車両から降りようとしていました。声をかけると、地元の有名な観光地に満開の花を見に行くのだ、と教えてくれました。彼を駅前でタクシーに乗せて、運転手に行き先を告げたときに「え？」という表情が浮かびました。まさに、この映画と同じでした。

「映画を感じる」、観るのではなく感じる、なんて素敵な表現でしょう。「色を感じるの」、見たことない色を感じる、なんて素晴らしい力なのでしょう。

映画でなくても、私たちは、例えば、有名な景勝地に行って、美しい景色を見、写真をとり、それでなんとなく満足してはいないのでしょうか？私たちは目から入ってくる情報が圧倒的すぎて、その他の情報をたくさ

ん取りこぼしてしまっているのではないでしょう。もしかしたら、同じ場所に行った目の不自由な人が「感じる」ことよりも、私たちがうけとる感動は少ないのかもしれない。

「色の違いなんて無意味」

映画の中のドライバーは、アフリカ系の移民です。日常的に人種差別的な扱いをされている（感じている）のかもしれない。だから、「俺の肌の色は（わかるかい）？」の質問自体が人種差別的なニュアンスを含んでいるのですが、この女性は即座に「色の違いなんて無意味」と一蹴します。

肌の色の違いなんて無意味。目が見えなければ当然です。ドライバーや、私たち、目が見える者たちの方が、「色の違い」がわかるがゆえ、そこに意味を、無意味な、あるいは、間違っただけの意味を与えてしまっているのではないのでしょうか？

実はこのエピソードの前半、女性を乗せる前に、同じアフリカ系の客とのやりとりの中でドライバーは（ジョークとしてですが）「何も見えない人」と呼びかけられて憤慨するシーンがあるのです。目が見えるドライバー、そして、目が見える私たちにも実際は「見えていない」もの・「感じていない」ものがたくさんあるのではないかという、感慨と反省をこのエピソードは促しているのではないだろうかと思っております。

「生きる」とは五感と心で感じること

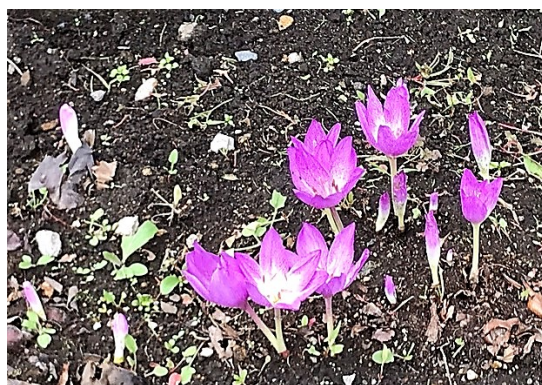
私のフィールド（活動の場と対象）は、以前お伝えしたように、ハンセン病療養所とハンセン病回復者の方々とその家族です。ハンセン病を発症した方々は、治療法が確立される前は、知覚麻痺や視覚障害になる方が多くいらっしゃいました。「プロミン」という特效薬ができてハンセン病自体は治っても時すでに遅く、後遺症として知覚麻痺や視覚障害、顔や手足に変形が残りました。それでも人の

手を煩わせずに情報や知識を得たいと思えば、視力を失ってもわずかに残る触覚で点字を習って理解する。それも叶わない重度になっても、最後まで残ると言われている味覚を感じる「舌（や唇）」で点字を読む。

私は目が見えない回復者と関わる時、一種の緊張感をいつも感じています。それは、「人としての未熟さや薄っぺらさを感じとられる」という羞恥と恐怖にも似た感覚です。この方たちにとって、「生きる」ということは、五感のすべてと心を使って真剣に「感じる」＝「見る」、ということなのではないかと思うからです。見えている人には見えないものが「見える」・「感じる」。そういう人には、どう繕っても見透かされている、と私は感じます。

ラストシーン…

映画は続きます。女性がタクシーを降りる時、ドライバーは「気をつけて」と声をかけます。でも、その直後に自分が衝突事故を起こし相手のドライバーから「目が見えないのか！」と言われてしまいます。気をつけなくてはいけないのは、実はドライバーのほうでした。そして、このドライバーは、私たちなのかもしれません。



イヌサフラン（コルチカム）の花の薄紫色からは優しさを感じます。楽泉園の入所者のお庭の片隅に咲いていました。